(2) 教育研究組織

当該大学の学部・学科・大学院研究科・研究所などの組織の教育研究組織としての適切性、妥当性（A群）

本学の理念・目的を達成するために、必要十分な教育研究上の組織 [大学基礎データ表 1、表 2] を設置している。

大学院研究科、学部・学科は、本学の理念・目的をふまえ、適切に管理運営されている。それぞれの大学院研究科、学部・学科の運営についての詳細は、3 教育内容・方法等、5 教員組織の章で記載されているが、概要については以下のとおりである。

【学芸学部】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

学芸学部は現在、英語英文学科・日本語日本文学科・音楽学科・情報メディア学科の4学科から構成されている。

学芸学部という名称は、全国的にみれば数少ないものであるが、本学の理念であるリベラル・アーツ教育の重要性を認識することによるものである。

この学部の研究教育の領域が、日本および英米の言語および文学の分野などだけでなく、時代の要請を受けて設立された一部芸術的性格を持つ情報メディアの分野を持つこと、さらにリベラル・アーツ教育を国際化した現代に、より即した形で具体化した形で展開しようとする学科を設立することは（2007年度に国際教養学科を新設する）、この名称を持つ学部に対応しいといえる。

【学芸学部 英語英文学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

英語英文学科は、本学開学時における最初の学科である。初めは英文学よりスタートしたが、その後、時代の要請に応えるべく、英語4技能をはじめとして、文化、言語、コミュニケーションの各コースも開講され、それに沿った形で教員も採用され、教員構成がなされてきた。

現在、専任教員数は26名で、「英米文学」「英米文化」「言語」「コミュニケーション」の4つの分野の教育を担当し、同時に英語科教職免許に対応する科目を開講・担当している。

【学芸学部 日本語日本文学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

日本語日本文学科は、日本語研究と日本文学研究および日本語教育の3本を柱とした教育を行っており、それぞれの柱に対して複数の専任教員が置かれている。特筆すべきことは、日本

語研究は古代語研究と現代語研究に分れているが、現代語研究には3名、古代語研究には古代・中古・中世の各時代の研究を専門的に研究する専任教員が各1名ずつ配置され、日本文学研究もまた古典文学研究と近現代文学研究とに分かれているが、近現代文学研究には3名、古典文学研究には古代・中古・中世・近世の各時代を専門とする専任教員がそれぞれ1名あるいは2名配置されていることである。

また、古典文学には別に日本古典文学と関わりの深い漢文学の専任教員1名もあり、これらの日本語研究および日本文学研究の専任教員の専門分野は例えば和歌や説話や歌舞伎など、ジャンルが重複していない。これらのことによって、日本語日本文学科のカリキュラムは極めて多彩で充実したものとなっている。

【学芸学部 音楽学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

音楽学科は、演奏専攻の演奏に関わる科目を担当する専任教員8名、音楽文化専攻の創作、研究に関わる科目を担当する専任教員6名によって組織されている。

そして、演奏専攻においては、声楽コース、鍵盤楽器コース、管弦打楽器コース、音楽文化専攻においては、作曲コース、コンピュータ音楽コースの創作系、音楽療法コース、音楽文化学コースの研究系に細分されている。

専任教員は、各専門研究分野で極めた研究成果を、教授内容に反映させ、各コースの専門、即ち第一実技や卒業研究などの必修専門科目を担当するだけでなく、両専攻共通に開講している講義、実習、演習そしてそれらの融合系科目を担当し、両専攻の連携を図っている。

また、音楽科教員免許に対応する科目も担当している。このことは、音楽学科の理念や目標を遂行する上で適切であり、教育目標を達成することにおいても妥当であると考えている。

【学芸学部 情報メディア学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

リベラル・アーツ教育を基盤とし、幅広い研究領域を幅広い研究領域を擁する本学において、情報メディア学科もその一翼を担う教育研究組織としての取り組みを行っている。

情報メディア学科では、新たな時代の要請に対応できる、メディア文化研究力、造形表現力、情報リテラシー育成の視点を含む現代的な意味での情報やメディアに関する教育や研究を行う組織として、専任教員13名と特別契約教員1名から構成されている。

情報メディア学科では、広範な情報メディア系科目群の選択肢と全学共通のカリキュラムを融合させることで、真に目的意識を持った教育を行うことができると考える。そこで、本学が行ってきた広範なりベラル・アーツ教育の枠を踏まえつつも、そこから一歩進んだ知識修得と実践、造形表現、情報リテラシーを教授する科目を設置している。

全体として大きくメディアデザイン科目群、メディアコミュニケーション科目群、メディアテクノロジー科目群の3つの科目群から構成されており、教員もそれぞれ3分野に適切に配置

されている。

【現代社会学部】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

現代社会学部は、5つのコースからなる社会システム学科と現代こども学科から構成されている。

現代社会学部の教育研究組織としての適切性は、社会システム学科における学生数に対しての教員数の相対的不足などの問題があるが、各コースごとの教員配置も均等であり、おおむね妥当である。

社会システム学科の目標は、ビジネス界を初め実社会の各方面で主体的に活躍できる女性の人材づくりであり、また現代こども学科の目標は、小学校教員養成を主眼にしつつも、それ以外の子ども関連産業にも適合的な女性の人材育成をはかっている。

現代社会学部は、本学唯一の社会科学系学部であることから、社会科学の多様な専門分野の教員から構成されており、開講科目のほとんどが他学科受講可となっているので、受講生に占める他学科学生の割合が高い学部でもある。

このことから、本学の教育理念の一つであるリベラル・アーツ教育を本学学生に幅広く提供できる教育研究組織としての性格もあわせ持っている学部であると言える。

卒業生の多くは、金融・保険業をはじめとして多様な産業界に進出しており、幸いにして高い評価を受けていることから、教育研究組織としての適切性を社会的に認知されている。後述したように、社会システム学科にあっては、法律系科目・英語運用能力・情報処理能力の形成を柱にした教育組織体制を引いていることが、このような実績につながっていると考えられる。

また、大学院やロースクールなどにも毎年一定数の卒業生が進出しており、高度な職業人や研究者養成という課題に応えられる教育研究組織でもある。

【現代社会学部 社会システム学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

社会システム学科の現状は、学生入学定員1学年300名に対して、専任教員22名で構成されている。学生は、1年次において「基礎演習」や「入門・概論科目」などの基礎的科目を履修し、2年次からの専門科目である「応用・各論科目」での学習を経由して、3年次から、国際理解コース、ライフマネジメントコース、ビジネスマネジメントコース、京都学・観光学コース、法システムコースの5コースに所属が決まる仕組みとなっている。その際、所属コースが開設している科目だけを受講するのではなく、学科が目指している法律・英語・情報などの諸能力を身につけた指導性に富む人材の供給が可能になるべく、他コースの科目も幅広く受講できる仕組みとなっている。その意味では、教育組織としての適切性・妥当性ととも柔軟性を併せ持っている。

点検・評価事項としては、現代性に富む科目の設置は初期目標を達成しつつあるが、その成果を学生個々人が実社会で通用する実力として形成するためには、カリキュラム全体の整合性と高

度化を図りつつ、個別指導が可能な時間帯を確実に確保できるように、専任教員の担当時間数を削減したり、また、学生に対する有効な指導法などを FD 活動の進展と併せて研究することが必要となっている。

【現代社会学部 現代こども学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

現代こども学科の現状は、専任教員20名で構成され、完成年度前であるとはいえ、小学校教員を熱望する学生の意欲向上と子ども関連産業の発展可能性に関する理解が認められる。特に、教育実習を終えて、教員希望を具体的かつ明確にした学生が生まれている。2006年度から、進路を考える機会として、学科主催のガイダンスなども開催しており、教育指導の点で柔軟かつ機敏な対応ができるように工夫している。

点検・評価事項としては、小学校などの教育現場にふれながら教育の諸問題を考察していく機会がまだまだ少ないことにある。改善方策は、各自治体との間で締結しつつある学校ボランティアのいっそうの充実や小学校現職教員による実地指導などの場面を充実していくことである。

【薬学部】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

薬学部は、4年制課程と6年制課程の両課程ともに医療薬学科の1学科から構成される。薬学部の学生が卒業後に就業する職種は、薬局・薬店における調剤薬剤師から創薬研究者まで多岐にわたる。4年制課程において、他大学薬学部や薬科大学の多くでは複数の学科を設置しているが、学科間でカリキュラムに殆ど差がない現状である。4年制課程と6年制課程のいずれにおいても、1学科のカリキュラムで薬学部の学生の多様な進路に十分対応できると考え、1学科制をとっている。

【薬学部 医療薬学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

薬学部医療薬学科は、23名の専任教員（教授15名、助教授5名、講師3名）で構成され、それぞれの専門領域に基づき15の研究室を構成している。

薬学部医療薬学科には、専任教員に加えて18名の特別任用助手が配置されており、1研究室は専任教員2名、特別任用助手1名か、専任教員1名、特別任用助手2名の構成になっている。

講義科目は専任教員が担当し、薬剤師の国家試験に必要な科目はいうに及ばず、薬学部学生の多様な進路に十分対応できる科目数と講義内容を提供している。

実習科目は、研究室単位での担当が基本となっている。1研究室を構成する教員は3名であるが、実習科目は学生を約70名ずつの2グループまたは約50名ずつの3グループに分けて実施しているほか、必要に応じて、他研究室の助手も加わる体制になっており、教育効果及び安全性の点で問題はない。

【生活科学部】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

生活科学部には人間生活学科と食物栄養科学科の2学科があり、このうち、食物栄養科学科にはさらに食物科学専攻と管理栄養士専攻がある。両学科とも、それぞれの教育目標を適切に遂行できる組織を配置している。

【生活科学部 人間生活学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

人間生活学科は、3科目群と多様な専門分野によって構成された複合的な総合学科である。人間生活学科の教育研究組織は、10の研究室、10名の専任教員によって形成され、人間生活学科の理念・目的に沿って、人間生活の様々な側面から研究教育できるように、専門分野の異なる教員を揃えている。

人間生活学科の理念・目的並びに研究・教育課程の種類・性格、学生数より判断して、専任教員数10名は最低限確保しなければならない人員である。それが確保できている現行教員研究組織は、適切で妥当な状況にあると考える。

【生活科学部 食物栄養科学科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

食物栄養科学科には食物科学専攻と管理栄養士専攻があり、各専攻の入学定員はそれぞれ55名と80名である。各専攻の専任教員数は、食物科学専攻が6名、管理栄養士専攻が10名となっている。食物栄養科学科に所属する教員全体で両専攻の学生を指導する体制となっている。また、管理栄養士専攻では、栄養士法改正、栄養教諭免許制度の新設に対応する人的整備が進んでいる。

また、実験・実習においては、管理栄養士有資格者を含む契約職員（一部アルバイト職員）が事務助手を兼ねて実習補助として配置されている。

実験・実習を伴う学科の特性上、教育研究組織としては小規模で運営されているが、教育効果、学生の安全確保、栄養士法の規定の上から適切で妥当な組織設定である。

【文学研究科】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

文学研究科は、現在、文学研究科英語英文学専攻と日本語日本文化専攻を設置している。

英語英文学専攻は、英語英文学科を基礎とした煙突型であり、日本語日本文化専攻は、英語英文学科を除いた学芸学部を基礎として幅広い分野を含む専攻となっているが、どちらの場合も設定されている授業は、学部におけるそれとの関係が明瞭なものとなっており、それぞれの分野の研究を更に進めようとする学生にとって進学しやすいものになっている。

さらに、2 専攻はいずれも博士課程（前期）と博士課程（後期）を設けており、さらは一貫した研究を進めることができる体制が整っている。さらに近い将来、急速に発達してきた情報化時代に対応して、情報文化に関する科目群を 1 専攻として独立させる予定である。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）で設置されている授業のうちコアとなるもの（A 類科目）は、英文学および米文学に関する特殊講義と言語学に関する特殊講義からなっている。これを担当する教員は専任の任用教授であり、それぞれの分野において十分な研究実績のある者である。

また、これらの授業は学部におかれている授業（応用各論科目）との関係が明瞭であり、学部の段階で興味を持った問題をさらに研究しようとするものにとって受け入れやすいものとなっている。学内から進学する学生が多いのは、この関係の明瞭さによるものと思われる。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

文学研究科英語英文学専攻博士課程（後期）では博士課程（前期）の授業を直接に発展させるための授業 - 英文学特別研究・米文学特別研究・言語学特別研究 - の他に、新しい分野の研究を進めるための比較文学特別研究と、より専門的に英語を学ぶための英語学特別研究を置いている。これらを担当する教員は、それぞれの分野の研究に顕著な研究実績をあげているものを任用している。したがって、教育研究組織としての適切性・妥当性は確保されているものと思われる。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

文学研究科日本語日本文化専攻博士課程（前期）の A 類科目の授業（コアとなる科目）には、日本文学・日本文化コース、日本語・日本語教育コース、音楽文化コース、情報文化コースの科目群を置いている。これらのコースは、日本語日本文化専攻が基礎とする学部の 3 学科（日本語日本文学科、音楽学科、情報メディア学科）に対応するものである。これらのコースを担当する教員は、それぞれの分野を専門とする専任の任用教授である。

学生は、この A 類の科目群から 20 単位以上を修得しなければならないが、そのうち最低 12 単位以上は、いずれかのコースから修得しなければならないことになっている。これにより、内部から進学する学生は学部で学んだことをさらに深く学習し、研究することができる。ただし、コース内での修得単位を最低 12 単位以上という形で抑えたのは、他のコースの科目群（また B 類の科目群を含めて）として用意されている幅広い学問分野を積極的に学び、それぞれの研究分野で新しい研究を切り開いてもらいたいと願うからである。これは本学が理念とするリ

ベラル・アーツ教育に沿った考えである。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

文学研究科日本語日本文化専攻博士課程（後期）には、具体的な科目として『日本文学特別研究 . . . 』および『日本文化特別研究』、『日本語特別研究 . . . 』、『芸術文化特別研究』および『日本文学特別研究』の科目が用意されているが、これらの授業を担当する教員はそれぞれの分野を専門として研究している専任の任用教授である。ちなみに、日本語日本文化専攻博士課程（後期）では日本語日本文化の「歴史」「方法」「内容」などがそれぞれ独立して研究されるのではなく、それらを積極的にクロスオーバーさせて、有機的に関連する研究を目指している。

「日本文学特別研究」の領域に多くの科目が設置されているのは、史的研究と近現代研究とに分け、さらに日本語日本文化に影響を与えた中国文学の研究を加えて、より充実を図ったためである。「日本語特別研究」もまた同様の理由から史的研究と近現代研究とに分けたためである。

これらのことにより、日本語日本文化を研究する組織としては極めて充実したものとなっている。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

国際社会システム研究科は、「国際協力と国際組織」、「国際交流と社会」、「現代社会と文化」の3つの分野から構成されているが、各分野の担当教員を3名ずつ配置しており適切なバランスであると判断できる。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

組織の教育研究組織としての適切性、妥当性

生活科学研究科（食物栄養科学専攻）は、修士課程のみの設置であり、「食物栄養科学コース」と「臨床栄養学コース」を置いている。入学定員は、両コースあわせて8名である。専任の大学院任用教授は、9名であるが、3名の専任助教授も講義を受け持つ。特に、「臨床栄養学コース」では、「病態栄養学を中心とした講義科目、高度先進医療を実施している病院での1年間のインターンシップ、医師と協力しておこなう病態栄養の症例研究などを通じて管理栄養士の知識と技術を磨くことを教育目標としている」ことから、上記の専任教員以外にも連携先の4つの病院に客員教授をおき、インターンシップがスムーズに進むよう配慮している。さらに、複数の現場で働く医師や管理栄養士を客員教授とし、講義を担当させている。

生活科学研究科には、博士課程は未だ設置されていないため、修士課程各コースにおける修了者に対して他大学院（博士後期課程）への進学希望者に対する指導を含めながらも、主とし

て修士課程修了をくぎりとして社会に出る学生を対象とした教育研究組織として運営している。しかし、両コースの学生とも幅広い科目群から多くの知識を習得でき、かつ、各指導教授の下で修士論文を完成させるべく研究を推し進める体制となっており、生活科学研究科は、大学院としての教育研究組織として適切かつ妥当であると考え。